

# 大学初年次生に対する移動・観察型フィールドワークの実践

淡野 寧彦

愛媛大学社会共創学部

## Fieldworks on Visiting and Observing Form for First Year Course

Yasuhiko TANNO

Faculty of Collaborative Regional Innovation, Ehime University

### 1. はじめに

2016年4月に、愛媛大学では社会共創学部が新設された。同学部の理念として、「様々な地域社会の持続可能な発展のために、地域の人達と協働しながら、課題解決策を企画・立案することができ、地域社会を価値創造へと導く力を備えた人材を育成」することが明記されており（愛媛大学社会共創学部HP<sup>1)</sup>、こうした地域との連携強化を目指した学部新設の動きは、全国的にも拡大している。地域の持続的発展や継承などに大学が寄与するうえで重要な方策の1つとして、学生が学外において地域ステークホルダーと連携した様々な活動に取り組むことが挙げられ、このことはすなわち大学教育におけるフィールドワークの実践や高度化とも位置付けられる。フィールドワークを通じた教育効果の一例をみるならば、名寄市立大学道北地域研究所(2011)<sup>2)</sup>が示すように、地域の教育機関が産業や地域住民と一体となり、地域のニーズに密着した連携事業を展開したり社会応用能力のある人材を教育したりすることによって、地域社会における諸課題の具体的な抽出や対応策の実現、またこうした取り組みに学生が直接に関わることによる経験の蓄積や技術・自信の高まりなどが創出されることが見込まれ、学生・地域の双方にとって有益となる。

筆者は昨年発行の大学教育実践ジャーナル第14号においても大学におけるフィールドワーク教育の実践について検討した（淡野, 2016)<sup>3)</sup>。この中では、フィールドワークの手法が個人個人の経験にとどまらず体系化されつつある状況<sup>4, 5)</sup>や、様々な学問分野においてフィールドワークの導入が進められていること<sup>6, 7)</sup>、フィールドワークの実践を通じて大学と地域の諸機関との関係性が強化されうること

と<sup>8, 9)</sup>などに触れた。そのうえで、愛媛大学近隣地域を対象とした調査形式によるフィールドワークを授業の一環として大学初年次生に課し、その成果と課題について検討した。一方、本稿において取り上げるフィールドワーク（以下、本FW）と淡野（2016）にて検討したフィールドワーク（以下、前回FW）との間には、大きく次の2点で異なる特色がある。第1に、学生自身が事前の情報収集や調査準備などに取り組まなければならなかった前回FWに対し、本FWは各地で説明を受けることが主であるため、学生が一時的な知識の吸収のみにとらわれることなく、地域の実態を詳細に把握しようとする意識を持ちながら主体的に学ぶことが重要である。そのためには、単に当該地域の事物を見学するという意識にとどまらず、これらが存在することの意義や保全・活用に関わる地域ステークホルダーの重要性などへの視点を学生が持てるように教員が指導や助言を与えつつ、学生自身がどのように地域に関わっていくのかについて、実践を通じた分析が必要であろう。第2に、前回FWと違って本FWのように遠方を訪れてフィールドワークを実施する場合、その移動中や不慣れた場所での活動には、日常生活以上に大きなリスクが伴うことが想定される。フィールドワーク中の不慮の事故や怪我などを可能な限り防ぐためにも、フィールドワークの安全・安心を念頭においた事前の準備や計画が重要である。大学教育のなかでフィールドワークの重要性が増すなか、この点についても、実践例をふまえた情報および考察の蓄積が急務であろう。

以上より本稿では、社会共創学部地域資源マネジメント学科文化資源マネジメントコース所属の1回生16名および教員5名が参加した愛媛県南予地方における移動・観察型

のフィールドワークを対象として、フィールドワークの実施状況を示すとともに、フィールドワークを通じて学生がどのような知見や意識を持つに至ったのかを明らかにすることを目的とする。本FWは「愛媛県南予地方の山と海と文化資源」と題し、2016年7月20日に実施した。なお主要な訪問先では、現地の地域ステークホルダーによる案内をあらかじめコース教員が役割分担して依頼し、協力を得た。

研究方法について、章構成とともに記す。まず2章では、本FWの全体的な内容と事前の準備を示す。また、訪問する地域に対する学生の認知や意識について、淡野(2014)<sup>10)</sup>にて実施した方法を用いて抽出する。これらに加えて、主要な訪問先である愛媛県松野町の河後森(かごもり)城跡と宇和島市遊子水荷浦の段畑などにおける観察内容についても記載する。3章では、フィールドワークを体験したことによる学生の気づきや意識などについて、学生自身によって記された振り返りコメントから分析する。以上をふまえて4章で、大学初年次生に対する移動・観察型フィールドワークの成果と課題に関して考察する。

## 2. フィールドワークの実施状況

### 2.1. フィールドワークの方法

本FWでは、愛媛大学城北キャンパスを集合・解散地とし、松野町の河後森城跡と宇和島市遊子水荷浦の段畑を主な観察地点としながら、南予地方の各地を大学所有のマイクロバスを利用して訪れた(図1)。上記2ヵ所では、文化資源の保全・活用に取り組む地域ステークホルダーによる案内・解説を受けたほか、移動中にはコース教員が事前に作成した資料をもとに当該地域に関する説明を行った。学生には、フィールドワーク前日に配布した資料をあらかじめ読んでおくよう指示するとともに、訪問地で説明を受ける際には、適宜メモを取るなどして、主体的な学習となるよう促した。また、フィールドワーク実施上の安全・安心面での対策として、夏季に屋外での活動が主体となり、林道などを歩く行程も含まれていることから、虫さされや怪我などを防ぐために、参加者には長袖、長ズボン、帽子などの着用を事前に通知するとともに、マダニにも有効な虫除けスプレーや負傷した際の除菌タオルなどを用意した。さらに、こまめな水分補給を促すとともに、体調不良を感じた際には速やかに教員へ申し出るよう、通知した。なおフィールドワーク当日に、学生1名より数日前に部活動によって足首を痛めたとの申し出があったため、引率教員1名が付き添いながら様子を見ることとした。

### 2.2. フィールドワーク実施以前における当該地域に対する学生の認知

フィールドワーク実施以前における学生の愛媛県に関する認知について、参加学生16名全員を対象に事前調査した。

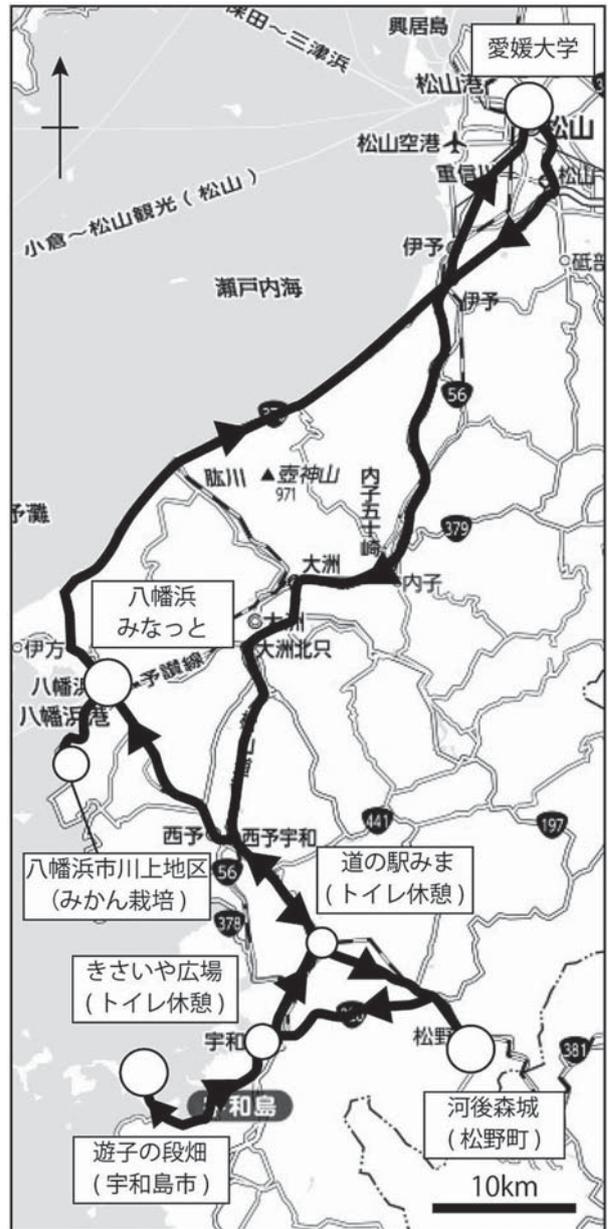


図1 フィールドワークの行程(2016年7月20日)

まず、愛媛県の20市町の場合に関する認知について、出身地が愛媛県内外の区分でみると、県内出身者(10名)の正答数は $16.4 \pm 2.3$ (平均±標準偏差)であったのに対し、県外出身者(6名)は $6.5 \pm 3.5$ に過ぎなかった。とくに県外出身者では正答率が70%以上となった市町がなく、認知に大きな差異がみられた(図2)。また、各市町の訪問経験についても、県内出身者では中予地方を中心に訪問率が60%以上を示したが、県外出身者は県内市町のほとんど全てを訪れた経験がなかった。一方、今回のフィールドワークで訪れる場所の1つである松野町については、県外出身者のなかにその場所を把握していた学生はいなかったが、県内出身者の正答率も30%にとどまり、隣接する鬼北町とともに県内市町の中でも認知度の低い地域であることがうかがえた。また、各市町に関連する事物などについて1つ

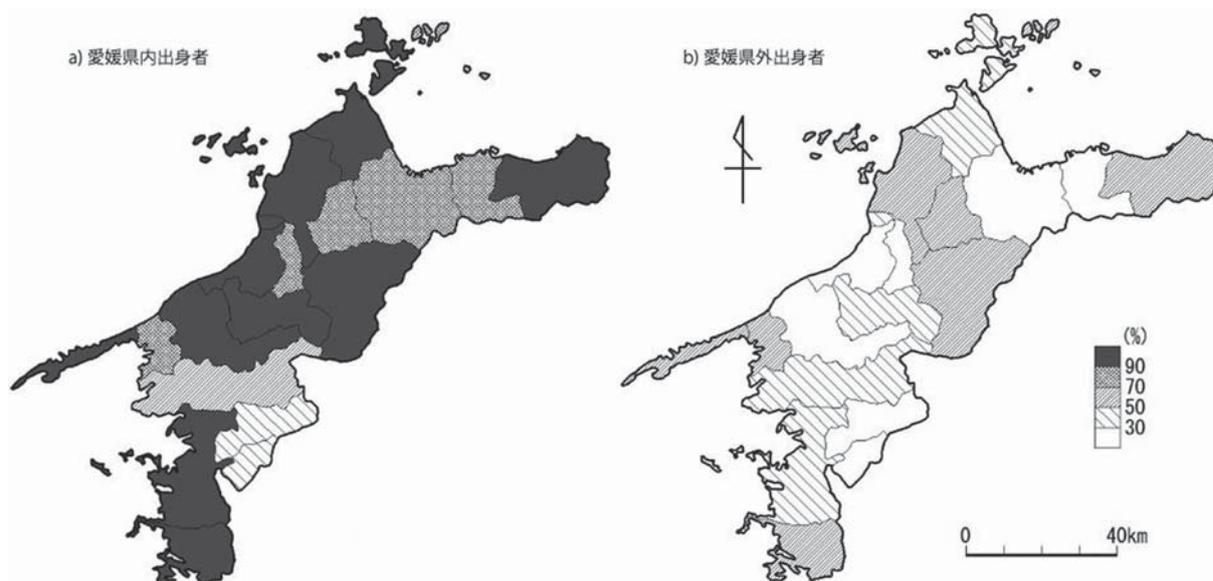


図2 文化資源マネジメントコース学生（16名）における愛媛県市町の認知（2016年）  
（学生への事前調査により作成）

ずつキーワードを回答させたところ、四国中央市の製紙業（10名）や砥部町の砥部焼（11名）、伊方町の原発（12名）のように共通する内容が挙げられた市町が存在した一方で、主に南予地方の市町では回答が分かれる傾向にあった。なかでも松野町や鬼北町に対しては、無回答がそれぞれ5名、4名ととくに多く、場所の認知なども併せて、学生にとってイメージしづらい地域であることがうかがえた。なお、事前調査の終了後に、本FWでは宇和島市遊子水荷浦の段畑が訪問地の1つであることを伝えた。宇和島市の場所については、県内出身者のほぼ全員が正解していたが、

県外出身者も含めて、これまでに遊子を訪れたことのある学生はいなかった。

また、フィールドワークがどのような活動であるのかやどのような目的を持っているのかについても、事前に参加学生16名の意識を自由記述形式で問うた。回答の傾向として目立ったものは、地域住民と直接関わり現場の生の声を聞くことが12名、大学内の講義のみでは得られない情報や体験を得ることが9名、様々な人や組織と連携することが6名、地域の課題の発見や地域資源の活用方法を考えることが5名などとなった。こうした意識については、高校ま

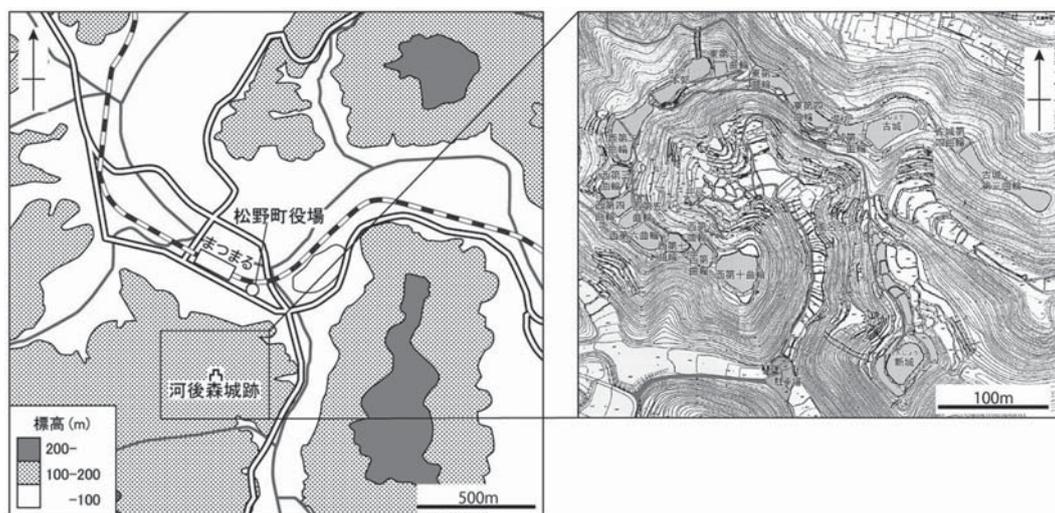


図3 松野町の河後森城後周辺部の地勢（2016年）  
（筆者原図（左）および松野町教育委員会作成図を一部改変（右））

での課題研究などでの体験や、社会共創学部必修授業である「社会共創学概論」や「リーダーシップ入門」などで教わった内容などがもともになっているのではないかと推測された。

### 2.3. フィールドワークの対象地域と主な観察内容

松野町の河後森城跡は、築城時期は不明であるが、1500年代後半を中心に機能した山城である。河後森城跡は、高知県の中村（現、四万十市）や窪川（現、四万十町）と愛媛県の宇和島や宇和（現、西予市）などを結ぶ街道沿いに位置し、戦国期には一条氏と西園寺氏、さらには長曾我部氏らの間で地域の掌握を狙った争いが繰り返された（図3）。江戸期の1615年に発布された一国一城令によって廃城になったとされるが、1997年には国の史跡指定を受けるなど、その歴史的・文化的価値が注目されている<sup>[1]</sup>。現地のフィールドワークで学生らは、松野町教育委員会学芸員の案内・説明を受けながら、城が存在した当時の曲輪や馬小屋などの建物、門などの復元が進められている様子や、城の機能を実体験するために乗馬体験や城攻めイベントが開催されていること、またこうした活動に町や地域住民らが一体となって取り組んでいることなどについて学んだ（図4）。

一方、宇和島市遊子水荷浦の段畑は、江戸期以降に開墾された段々畑であり、漁業のみで生計を立てることの難しかった地域住民にとって、主な食料となる穀物や換金作物としての桑などを得るための重要な手段であった。しかし、第二次世界大戦後は、地域住民の就業形態が新たな漁業として定着した養殖業中心となり、農家数の減少や高齢化などが進行した結果、段畑の耕作面積は1965年の10haから1995年には2haにまで減少した。こうしたなかで、地域住民らが中心となって段畑の価値や景観の美しさを評価する取り組みが2000年頃から次第に活発化し、現在では農水省の「農村景観100選」や国交省の「重要文化的景観」などに指定されるまでになった<sup>[2]</sup>。現地のフィールドワークでは、段畑の保全・活用の主体となるNPO法人の理事より、段畑保全活動の経緯や現在の活動状況、活動を継続させるうえでの重要事項などについて説明を受けたほか、理事と学生らとの間での質疑応答や意見交換も行われた（図5）。

上記のほか、八幡浜市川上地区においては果樹園を観察しながら柑橘農業の特色について、また八幡浜港においては魚市場や港湾施設を観察しながら漁業の特色について、それぞれ教員による説明を実施した。また、移動中のバス内では、車窓の景観などに関する説明を配布資料に基づきながら教員が実施したほか、フィールドワークの終盤では学生および教員の全員から本FWに関する意見や関心事についてのコメントを求め、参加者間の意識共有を図った。

フィールドワーク中の学生の態度は真面目で、集団行動



図4 松野町河後森城跡におけるフィールドワークの様子  
(2016年7月20日 筆者撮影)

復元された馬小屋の前で地域ステークホルダーによる解説を受ける。



図5 宇和島市遊子の段畑におけるフィールドワークの様子  
(2016年7月20日 筆者撮影)

段畑上にて地域ステークホルダーによる解説を受ける。

のもと、地域ステークホルダーの説明を聞きながら、現地を観察していた。一方、バスでの移動中において、教員の説明中に居眠りをしたり、スマートフォンを操作したりする行為も一部でみられた。参加当初から足を負傷していた学生は、無理をしない速さで歩くことによって行動に参加できたが、フィールドワークの最後では足の痛みを訴えていた。また、炎天下の行動であったために、顔にやや火照りの見える学生も1名存在した。本FWに関わるなかでは、特段の負傷や体調不良を申し出る者はいなかった。

### 3. フィールドワークに対する学生の意識

本FW終了時に、参加学生全員に対して、本FWへの関心の度合いや得られた知見などを記入する振り返り用紙を配布し、数日後に全て回収した。まず、本FWに対する関心の度合いについてみると、「非常に関心・興味を持てた」5名、「まあまあ関心・興味を持てた」6名、「あまり関心・興味を持てなかった」3名、「全く関心・興味を持てなかった」0名、無回答2名であった。

表1 フィールドワークに対する実施後の学生の主な意識

学生の主な振り返り内容	回答人数(名)
現地で得た情報の収集・記録方法	7
現地の訪問や、地域社会・住民とのコミュニケーション	6
フィールドワーク中の学生自身の主体的な行動	6
フィールドワークのための事前の下調べや準備	5
フィールドワークの実施方法	4

(振り返り用紙記入内容により作成)

本FW全体に関する意見や実感としては、主に以下の内容が示された(表1)。とくに多く挙げられた内容の1つとして、まず現地で得た情報の収集・記録方法に関する言及が7名よりみられた。具体的には、「最初から最後までの内容を詳しく覚えていることは不可能なので、しっかりメモをとることがとても大切」といった意識や、「聞いたことを自分の中で重要な事柄に分けて、すばやくメモすることが難しかった。もう少し上手くメモがとれるように意識して書いていきたい」、「反省としては、メモを取るための紙が小さくて、用意して頂いたバインダーに対応できなかった」といった実際に現場でメモを取る技術の難しさを振り返った回答がみられた。

次に、現地を訪れることや、地域社会やそこで暮らす人々とのコミュニケーションなどの重要性を6名が指摘した。具体的な記入例としては、「地域の人の生の声を聞くことで課題をより身近に感じる」、「ステークホルダーの方々がどれだけ地域を愛しているかを実際に交流して肌で感じる事が重要だと感じた」、「その土地ごとの問題がある」といった意見があり、地域の実情や諸課題を深く認識するための手段として、フィールドワークの有効性を意識する傾向がみられた。また、同じく6名がフィールドワークにおける主体的な行動の重要性を指摘した。すなわち、「自分から地域に入って行くわけだから、聞きたいことはもっとガンガン聞くべき」や「ただ学んだことを書き留めるのではなく、それらを整理できるようにすれば、今後の生活(授業)で役立つと考えた」といった現地で情報を得るうえでの行動、また「自分が知った知識をより多くの人に伝えていきたい」、「自分ならどうするか、批判的に考えることや、観光客の目線やよそ者目線の視点が大事だと感じた」、「フィールドワークの中で何度か解決方法を考えるようもとめられたが、ありきたりな答えしか出せなかったことにもどかしさを感じた」のように、収集した情報に対して自分がどのように考えるのかや他者にどのように伝えられるのかといった意識についても醸成がみられた。

フィールドワークに際しての事前の下調べや準備の重要性は5名が指摘した。「自分で事前に調べ何について調べたいのか、疑問点等についてまとめておくと、より整理して、質問のときにも効率よく聞くことができる」や「何も考えずに行くより、少し考えてから行くと、自分の考え方

との違いが分かる」といった記述がみられ、現地を訪れてみてはじめて考えるという行為には限界があることを実感した内容と位置づけられる。併せて、前述の学生の主体的な行動が現地でのフィールドワーク実施以前から必要となる点にまで結び付けられるよう、教員が指導していくことの重要性が考えられた。また、本FWの実施方法に関する意見が4名よりあった。このうち3名からは、「一ヵ所に滞在する時間が短かすぎて全体的に浅い内容」、「一つの地域についてじっくりと調査する機会もほしい」、「もっと焦点をしばってその地域について深く掘り下げられようなフィールドワークもしたい」のように、フィールドワークを特定の地域にしばった調査や活動としてとらえる記述があった。こうしたとらえ方は無論、間違ったものではなく、学年を経るごとに重視される内容ではあるが、フィールドワークには広範な地域の諸特徴を幅広くとらえる視点も含まれることを、学生指導のなかで説明する必要のあることが考えられた。一方、「巡検を行う場所へ向う過程でも、外を流れる景色の変動や所要時間など、様々なことを行っておくことが重要であると感じた。フィールドワークへ行く前には、目的地のことばかり考えていたので、これからは色々なものに目を向けていきたいと思った」のように、多面的な視点の重要性を本FWを通じて実感した回答もみられた。

上記とともに主な訪問先に関する記述について、まず河後森城跡に関するものをみると、「歴史は伝言ゲームのようなもので、様々なものを介して伝わっていくうちに歪んでいく。いかにその歪みを正せるかが大切」、「遺跡は整備と復元の兼ね合いが難しいのだと感じた。観光地としては歩きやすいように歩道をアスファルト舗装するのがいいのだろうが当時の山道としての姿を守っていくならそのようなことはしてはならない」、「発掘された穴の大きさ等の限られた情報から、穴の大きさと柱の高さの比率からおおよその門の大きさを計算したり、絵巻物等の資料や、それらを踏まえて専門家の方々と協力することによって、馬屋のような建物を復元していることによって当時の様子をイメージでき、より来た人に興味をもってもらえる」といった、文化遺産の適切な保全のあり方に関する考察や、「最も重要だと感じたのは、『住民と一緒に整備する』という点」、「雑草は定期的に除草されているが、除草をする人も

平均年齢が高い団体ということで河後森城を保全していく後継者（の確保）が悩まれる」といった保全活動に関わるマンパワーをどのように集約・維持できるかに関する指摘が挙げられた。文化遺産としての河後森城跡の活用策については、「近くの小・中・高校生を呼んで、一緒に植生調査をする」、「井戸からくしなどの生活用品が見つかったことにヒントをもらって、河後森城で宝探しをしてみる」、「みんなで除草作業をした後に、当時の膳を囲んだ癒労会を行うなどイベントと関連づけて管理につなげられるようなもの」といったアイデアが挙げられた。

遊子水荷浦の段畑については、眼前にそびえる急傾斜の段畑や段畑上から眺める宇和海の景観を高く評価するコメントが多くみられ、これまでの段畑の保全・活用方法に強い関心を示す意見が多数存在した。一方、保全活動の現況について、段畑の石垣はもろい砂岩でできており、このことが加工のしやすさとともに石垣自体の崩れやすさにもつながっているために管理が難しくなっている実態を知った学生からは、「地域資源に対する観光客と地元住民との思いのギャップは、ここに限らずどこの観光地でも乗り越えなければいけない重要な問題」という指摘が挙げられた。また、「段畑を登ったとき、むき出しになったイノシシ対策の電気柵や、急で高く、不安定な手すりの階段は危険なように感じた」といった、観光客向けの対応が必ずしも十分でない点に注目した意見もみられた。今後の段畑の活用策としては、「(ジャガイモを)JAを介してではなく)自分らの手で売れないか」や、「『海に見えるひまわり畑』としてPR」したうえで「ひまわりの種から油をとって数量限定ポテトチップスを作って売る」といった新たな商品開発案、「写真コンテストを開催」などのイベント企画案が挙げられた。これらとともに、地域ステークホルダーの説明内容を重視して、「泥くさく土着することでその地域にしか出せない味を出す」といった意見もみられた。

#### 4. 移動・観察型フィールドワークの成果と課題 —むすびにかえて—

本稿では、地域との連携強化を大きな理念として掲げる社会共創学部の中初年次生16名を対象に、愛媛県南予地方を日帰りで訪問し、現地にて地域ステークホルダーより案内・解説を受ける移動・観察型フィールドワークを実践し、その成果と課題について分析することとした。

本FW実施以前から、学生はフィールドワークを通じて地域の実態をより具体的に把握できることや様々な人や組織と連携して行動することを意識しており、本FW中も地域ステークホルダーの説明に熱心に耳を傾け、現地の様々な地域資源の把握や発見に努めた。さらに学生らは、本FWを通じて、現場での情報を的確にメモをとるなどして記録することや、地域ステークホルダーと円滑に対話する

ことなどが、自身の想像以上に難しいスキルであることを実感していた。また、地域住民らによる地域資源の保全・活用が比較的進展している地域であっても、担い手の不足や十分な施設整備に至らない事柄があることなど、当該地域の諸課題を認識する学生も複数みられた。フィールドワークに対する学生の意欲は全体的に高いことから、こうした意欲をいかに地域ステークホルダーらと連携した活動やそれによる学びに結び付けていけるかが、学生指導において非常に重要であることが考えられた。本FWでは、地域ステークホルダーとの直接的な会話や引率教員のこれまでの研究活動による成果を学生に示す機会などを設けることで、学生のフィールドワークへの関心向上を図った。今後はさらに、フィールドワークでの体験が学生にとって大学での学び全体にまで結びつくよう、学内での講義による振り返りや他地域への応用可能性の検討、そして次のフィールドワークの実践などへと内容を発展させていくことが重要であろう。

大学初年次生にとって、彼（女）らが直接、地域ステークホルダーと結びつく機会や方法は少ないと推察される。したがって、本FWでもコース教員が地域のステークホルダーとの円滑なコミュニケーションを事前段階から心がけることにより、現地での長時間にわたる対応を得られた。こうした協力を継続的に得るためには、教員による地域貢献活動はもとより、フィールドワークを通じた学生の成長の姿についても、何らかのかたちで示すことでフィードバックする重要性が考えられる。また、本FWでは重大な事故等は発生しなかったものの、学生が怪我や疾病を発症した際には、個別に教員の対応が必要となる。大学から遠方の地において、引率教員数が少ない場合の突発的な事態への対応は著しい困難が予想される。フィールドワークの有効性を重視・強調するのみならず、フィールドワーク中の安全・安心対策についても、併せて周到な準備が必要であると考えられる。

本FWの実施に際しては、松野町教育委員会学芸員の亀沢一平様ならびにNPO法人段畑を守ろう会理事の松田鎮昭様より、事前の情報提供や現地での案内など、多大なるご協力を賜った。また、筆者と同じ社会共創学部地域資源マネジメント学科文化資源マネジメントコース所属の教員各位には、フィールドワークのための準備や各地での説明などに協働いただいた。以上、記して厚く御礼申し上げます。なお、本FWの様子は、2016年7月23日付の愛媛新聞において報じられた。

本稿の作成に際しては、科学研究費基盤研究(B)「課題発見解決型フィールドワーク教育の多面的評価方法の構築」(課題番号16H03060, 研究代表者: 松村暢彦) および平成28年度学長戦略経費「愛媛大学における地域調査のためのフィールドワーク体制の確立」(研究代表者: 兼子 純)のそれぞれ一部を使用した。

注

- [1] 松野町役場HP<sup>11)</sup> および松野町教育委員会提供資料による。  
 [2] 高橋 (2013)<sup>12)</sup> およびNPO法人段畑を守ろう会理事の松田  
 鎮昭氏からの聞き取りによる。

引用文献・URL

- 1) 愛媛大学社会共創学部HP <https://www.cri.ehime-u.ac.jp/>
- 2) 名寄市立大学道北地域研究所 (2011): 「地域と大学－大学・学生と連携した地域活動－」『地域と住民』29, 147-152.
- 3) 淡野寧彦 (2016): 「大学初年次生に対する入門的フィールドワーク実践の成果と課題」『大学教育実践ジャーナル』14, 29-34.
- 4) 日本地理学会 (2013): 「特集フィールドワークと地理学知の還元」『E-Journal GEO』8, 1-65.
- 5) 筑波大学人文地理学研究グループ (2014): 「特集フィールドワーク方法論の体系化－データの取得・管理・分析・流通に関する研究－」『人文地理学研究』34, 1-254.
- 6) 出原生子, 伊丸岡俊秀 (2012): 「産官学連携による地域社会の価値を創出する教育」『工学教育研究』19, 61-70.
- 7) 道信良子 (2015): 「フィールドで育む共通感覚－日本の医学教育において人文・社会科学の視点を育成するための方法－」『医学教育』46, 322-328.
- 8) 野島章吾 (2015): 「大学教育における地域貢献活動型フィールドワークの意義：関西学院大学総合政策学部白山麓実習5年間の活動から」『総合政策研究』49, 87-119.
- 9) 柴田邦臣 (2009): 「社会調査と“現場”の関係－方法論としてのフィールドワークを再考する－」『社会情報学研究』18, 81-90.
- 10) 淡野寧彦 (2014): 「愛媛県に関する大学生の認知の地理学的研究」『人文学論叢』16, 87-100.
- 11) 松野町役場HP <http://www.town.matsuno.ehime.jp/site/kagomorijou/>
- 12) 高橋文男 (2013): 『漁業人生を振り返る ～地域における相互扶助と協力で魚価の生活充足を目指す～ JF遊子元代表理事組合長古谷和夫氏』JC総研.  
 (HPの最終閲覧日はいずれも, 2016年10月5日)